

かさまのれきし

第69回

天狗騒動

土師村明神山の戦い



淡島神社 (土師)



天狗党による土師村焼討

元治元年（一八六四）三月、藤田小四郎等水戸藩脱藩浪士は、尊王攘夷を唱えて筑波山に結集して天狗党と称しました。周辺の士民に広く参加を呼びかけ、それに対して農民・神官・浪人など攘夷思想を抱く人々が参加しました。一行は日光東照宮で攘夷の実現を祈願しましたが集団での参拝を禁じられ、栃木大平山へ移動、五月末には筑波山へ戻りました。その時には水戸領以外からも同志が集まり、六百人を超える勢力となりました。

幕府は開国策をとっていたので、水戸藩および周辺の諸藩に天狗党の取り締まりを命じ、水戸藩では市川三左衛門・朝比奈弥太郎ら諸生派が天狗党と対立しました。

天狗党の名の由来は、水戸藩九代藩主徳川斉昭の改革に反対する人々が藤田東湖・会沢正志齋らの改革派を、学問を鼻にかける成り上がり者で天狗になっていると称したことによるといわれます。一方、藩校弘道館で学ぶ若者を諸生と呼び、改革に反対する保守門閥派の人々を諸生派といいます。天狗党の献金強要などを阻止するために村々で結成された自衛組織が、武装して諸生派へ加わることもありました。鯉淵勢・河和田勢・薄井勢・寺門勢などの農兵隊がその例です。鯉淵勢には笠間地域の村々からの参加者もいました。

同年七月末、鯉淵勢が宍戸方面から天狗党分派の田中愿蔵隊を追って、土師村の明神山を戦場に激しい戦鬪を繰り広げました。女人信仰の淡島明神側に鯉淵勢が陣を敷き、同村

の鎮守八龍明神（明治初年高麗神社と改称）境内に田中隊が陣を構え、両軍鉄砲の撃ち合いとなり、流血の修羅場となりました。

劣勢の田中隊は、土師村の水戸街道沿いにある集落に火を放って退却しました。この戦乱の中で、土師村庄屋塩藤次郎は母屋から村の重要書類を抱え、土蔵に収めている間に田中隊に切り殺されました。藤次郎は自らの生命と引き換えに、村の貴重な文書を守りました。

この戦乱で、土師村五二軒のうち二六軒が焼かれ、淡島神社に隣接した真言宗善巧院も焼失。即死六人・怪我人五人・馬二頭焼死・一頭逃亡という甚大な損害を被りました。

田中隊の隊長田中愿蔵は弱冠二〇歳。江戸昌平塾教授安井息軒に学び、御前山の野口に創設された水戸藩郷校の一つ時雍館の館長を務めました。愿蔵は各地で軍資金を強要し、断るとその地を焼き討ちし、栃木町・土浦真鍋宿などが焼き尽くされました。このような放火・略奪を行ったために悪名を広め、民衆の反感を買い、後に捕らわれ刑死しました。

その後、土師村は藩と幕府に何度も復興の援助と年貢の減免を願い出て、米四七俵と金五両が支給されましたが、御林での建築資材の伐採も許されず、平年並みの年貢を徴収され、自力で復興しなければならなかったのです。

（市史研究員 萩野谷 洋子）

問 生涯学習課（内線382）